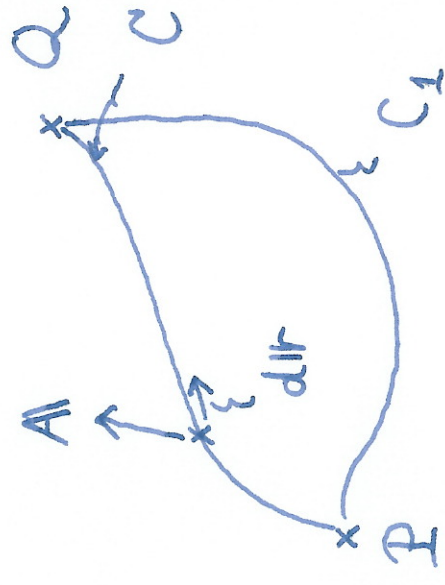


線積分: ^{ある} ベクトル A がある始点 P から終点 Q まで

経路 C に沿って積分する.



$$\int_C A \cdot \text{dir} \neq \int_{C_1} A \cdot \text{dir}$$

★ 一般に, P, Q が同じでも
経路が異なると結果が
変わる

★ ただし, $A = \nabla f$ スカラー関数 f の勾配として A が
書けるとき.

$$\int_C A \cdot \text{dir} = \int_C \nabla f \cdot \text{dir} = \int_P^Q df = [f]_P^Q = f(Q) - f(P)$$

マジッ
勾配演算子

始点における f と終点における f の差で
決まる.

勾配演算子

∇ : 三角形を ^{ちかま} 書きにした形で
ベクトルのように太字で書く。

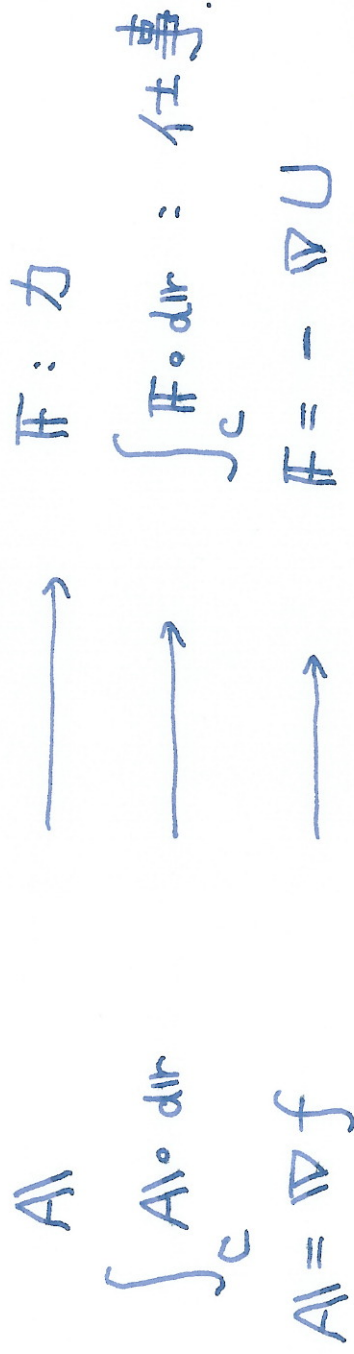
別モリ。

X Δ ... ラプラスアン $\nabla \cdot (\nabla f) = \Delta f$
 \square ... ダランベルション

今日の話 : 前々回・前回の話を力学に應用する。

前々回, 前回

今回



U : ポテンシャル (位置のエネルギー)

エネルギー保存則も運動方程式から導く。

第10章 エネルギー保存則

3/8

10.1. 仕事 ... 物理学では どのような量を「仕事」と呼ぶか?

10.1.1.1 定義

ある一定の力 F が物体に作用して、
その物体が l で表わされる移動をしたとする。

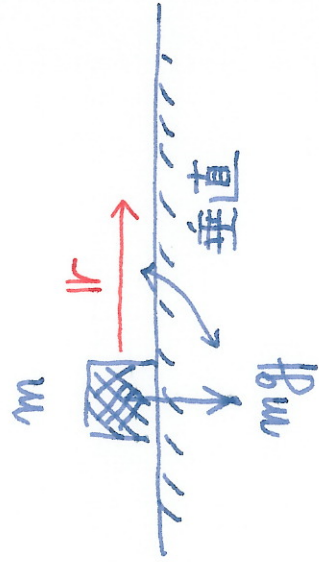
このとき

内積

$$W \equiv F \cdot l \quad \dots (10.1) \quad ; \quad \text{仕事}$$

「仕事」と呼んで、「力」が物体にした「仕事」と表現する。

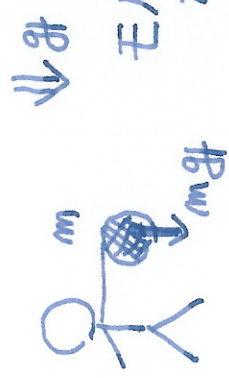
例1



$$W = mg \cdot l = 0$$

(力) \perp (移動の方向) $\rightarrow W=0$

例2



$$W = 0$$

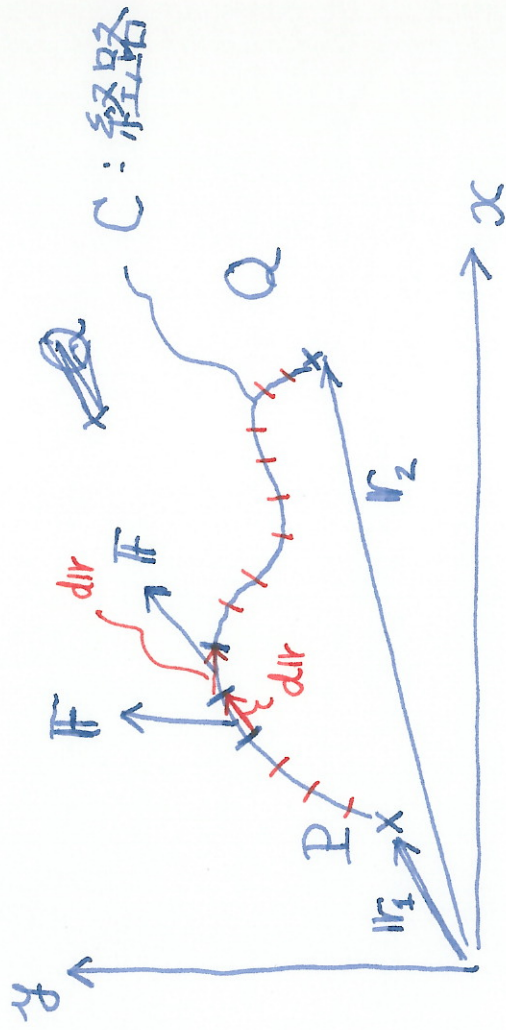
(物体が移動しなければ)
 $W=0$

一般化.

力 F が 時間・場所にも依存する関数.

4/8

物体が始点 P から終点 Q まで、ある経路 C に沿って移動したとする。



$$W \equiv \int_C F \cdot \text{dir} \quad \dots (10.2)$$

仕事は F の経路 C に沿う線積分として書ける。

10.1.2 仕事の次元, 単位.
(10.1)に基づいて考えると

$$[W] = [F][r] = (\text{力}) \cdot (\text{長さ}) = (M L / T^2) \cdot L = M (L/T)^2 = \underline{(\text{質量}) \cdot (\text{速さ})^2}$$

エネルギーの次元と同じ

MKS 単位 ~~M~~kg (M... meter, K... kg, S... second.)

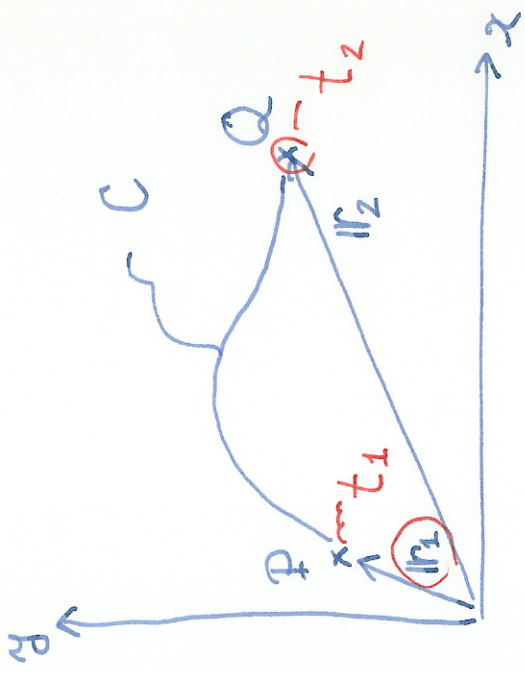
仕事の単位 $\text{kg} (\frac{\text{m}}{\text{s}})^2 = \text{kg} \cdot \text{m}^2 / \text{s}^2 = \text{J}$ ジュール

10.2. 運動方程式の線積分

運動方程式

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = \mathbf{F} \quad \dots (10.5)$$

(10.5) を始点 P (位置ベクトル \mathbf{r}_1) から終点 Q (位置ベクトル \mathbf{r}_2) まで経路 C に沿って線積分する。



$$\int_C m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} \cdot d\mathbf{r} = \int_C \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} \quad \dots (10.6)$$

カ F が物体にした仕事: W

変形をしていく。

\mathbf{r} または $d\mathbf{r}$ ~~は~~ 位置ベクトルが時間 t の

関数になっていることを考えると。

積分を $d\mathbf{r} \rightarrow dt$ に変数変換できる。

$$\int \dots dr = \int \dots \frac{dr}{dt} dt$$

(10.6)の左辺.

$$\int_c m \frac{dr}{dt^2} \cdot dr = \int_{t_1}^{t_2} m \frac{dr}{dt^2} \cdot \frac{dr}{dt} dt = \int_{t_1}^{t_2} m \frac{dv}{dt} \cdot v dt \dots (*)$$

$\left\{ \frac{dr}{dt^2} \right\} \left\{ \frac{dr}{dt} \right\}$ $\left\{ \frac{dv}{dt} \right\}$ v : 速度

★ $\frac{dv}{dt} \cdot v$ の計算

$$\frac{d}{dt}(v \cdot v) \stackrel{\uparrow}{=} \frac{dv}{dt} \cdot v + v \cdot \frac{dv}{dt} = \frac{dv}{dt} \cdot v + \frac{dv}{dt} \cdot v = 2 \frac{dv}{dt} \cdot v$$

連鎖律

内積の可換.

$$\begin{aligned} \frac{dv}{dt} \cdot v &= \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} v \cdot v \right) \\ &= \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} v^2 \right) \end{aligned}$$

$$v \cdot v = v^2$$

運動エネルギー: 運動の激しさをあらわす量.

$$T \equiv \frac{1}{2} m v^2(t)$$

(*)に戻って.

$$(*) = \int_{t_1}^{t_2} \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} m v^2 \right) dt = \left[\frac{1}{2} m v^2 \right]_{t_1}^{t_2} = T(t_2) - T(t_1)$$

以上をまとめると、運動方程式を線積分することに

よ

$$T(t_2) - T(t_1) = W \dots (10.10) \text{に 対応する式}$$

力が物体にした仕事

始点における運動エネルギーと終点における運動エネルギーの差

(運動エネルギーが始点から終点までどれだけ増えたか)

10.3 エネルギー保存則

もし力 F が スカラー関数 $U(x, y, z)$ を使って

位置だけの関数

$$F = - \nabla U \dots (10.11)$$

ポテンシャル (位置のエネルギー)

表わされる場合を考慮することにする。

(10.11) で表わされる力を 保存力

と呼んたりする

ポテンシャルから導びかれる力

$A = \nabla f$

∇f の意味

f : 標高と想定

∇f : 等高線に垂直.

山を登る方向が正.

$= \nabla U \dots$ ポテンシャルの山を登る方向を向く

保存力が働いているとき、仕事 W は

$$W = \int_C \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = - \int_C \nabla U \cdot d\mathbf{r} = - [U]_P^Q$$

$$= -U(x_2, y_2, z_2) + U(x_1, y_1, z_1)$$

(10.10)に戻ると、力が保存力の場合に

$$T(t_2) - T(t_1) = -U(x_2, y_2, z_2) + U(x_1, y_1, z_1)$$

$$T(t_2) + U(x_2, y_2, z_2) = T(t_1) + U(x_1, y_1, z_1) \dots (10.13)$$

$T+U$: 全エネルギー、力学的エネルギー

(10.13) ... 運動の始点における力学的エネルギー (右辺) と運動の終点における力学的エネルギー (左辺) が等しい!

→ エネルギー保存則.